

彼ら自身、お粗末な食糧事情のもとでの生活は認める。入ソ時同行した兵士たちも、黒パンとマンドリン（自動小銃）の弾薬を背負って、腰に水筒だけの軽装で行動する。食事は、黒パンをかじって水を飲んで終わりである。簡単で早いこと、驚きの一語に尽きた。

その後の抑留生活で垣間見たソ連人の食事風景も、捕虜たちと大同小異、あまり変わりがなかった。

私の場合、抑留生活での三種の神器に等しい宝物は、一枚の毛布・手製の木造スプーン（先の平たいものと二種類）、それに紙だ。寝る、食う、楽しむ、の生活原則最低限の道具だった。特に紙は、かけがえのない品物で、排泄した尻拭いには、もったいなくて絶対に使わなかった。主用途はまれに配給されたたばこの貴重な巻き紙として大切に所持していたものである。

## 厳寒の地で友との別れ

新潟県 高橋 勝 男

昭和二十年十月九日、我々を一週間乗せた有蓋車が停まった。全員降りるとの声に外へ出たら、水たまりが一面水が張ってあった。故郷では秋の節句で、クリの入った赤飯を食べてのお祭りである。ソ連での抑留生活が、この日から始まった。

二キロも歩いたところに八尺くらいの分厚い板塀が張りめぐらされ、その前後三メートルくらいに有刺鉄線が張られ、四隅には高いやぐらが立ち、歩哨が立っている。三尺くらいに切断した鉄道線路がぶら下げられてあり、五分くらいに打ち鳴らして、四隅互いに連絡をとり、居眠り防止と逃亡者を見張っているのだ。何の因果でこのようなところへ来たのかわからない。四、五日過ぎてから、労働が始まった。十一月ころになつたら全く寒くなり、着るものもほとんど夏服なの

で、労働には絶え切れなくなってきた。寝るのは部屋に二階寝台で、十センチくらいの丸太を片面を削り、むしろを一枚に毛布を一枚敷き、二人で一枚の毛布を掛けて頭足交互に寝るのである。食糧は悪く、コウリヤンかアワのトロトロ煮で、飯盒のふたに一杯足らずの食事で、それが冷えると、上の方に水がたまるのである。食事の量は一応決まっているのだが、例えば穀物三百五十グラムとなっているが、大豆だけのこともあった。大豆はいくら煮ても「のり」がないのでサラサラだ。目方はあるが量は少ない。そのようなものを食って働くのだから、なかなか仕事も思うようにできない。当初は飯の量もみな同じであったが、半年も過ぎたらパーセントにより食事の量も変わってきた。一〇〇%で食器に約一杯、八〇%で八分目、五〇%では半分くらいである。一二〇%を超える人は食器で少し山盛りであるが、そのような食事を食べる人は特殊な技術者であり、例えば時計屋とか、絵を書く人か、電気屋、大工といったほんの一部の人たちであった。一般作業者は八〇〜五〇%の繰り返しである。平均年齢

にしたら三十二、三歳くらいだったろう。血気盛りの男たちばかりなのに、作業休憩時等の話はいつも食べ物の話ばかりである。故郷もさまざまであるからいろいろの食べ物の話が出る。それでも綿入れの服とズボンまた外套等が渡されたが、シベリアも、十二月ともなれば全く寒いよりも痛いのである。温度計が零下二十度で風速一メートルのときは零下二十一度の計算だ。疲労した足を引きずりながら帰って来るとき、路上に黒い固まりが落ちてゐる。馬鈴薯かと思いい防寒外套のポケットに詰め込み、皆寝静まったころペーチカで焼いて食べるつもりが、いつの間にか解けて異臭が放っている。手を入れてみると、何のことはない馬糞であつた等の笑い話もあつた。

昭和二十一年はシベリアが干害に悩まされ、穀倉ウクライナ地方は雨続きとなり、ソ連の食糧事情も全く一変した。ソ連労働者は、働きたいけど食糧がなくて働けないとブツブツこぼし、作業場へ来ても仕事はしないのである。馬鈴薯畑へ行き、去年の掘り残しの芋を拾うのである。ソ連の馬鈴薯はでん粉が多いので、

馬鈴薯の二〇%くらいがでん粉化しているのだ。

その後収容所では、ものすごくシラミが発生し、体力は減退し、栄養失調者が出てきた。医者も少なくなかないのだ。下痢患者などは消し炭を粉にして飲ませるなどの最低であった。アメバー赤痢や回帰熱等が流行し、千五百人の収容所で多い日は十五人も死亡したこともあった。ソ連もこれには困った。町へ入浴しに連れていったり、衣類の熱菌消毒をやったり、躍起になって防除に専念した。その結果シラミは急に減少したが、困ったことは厳冬の死亡者の埋葬である。死亡者は小学校の教室大のところへ素っ裸で放置し、墓穴のできるのを待って、六人ばかりずつそりに積んでソ連人が墓所まで運ぶのである。墓穴は我々日本人が掘るのだ。四メートルから八メートルくらいの穴を昼夜二交替で二か所ずつ掘るのだが、地下四尺からも凍っていてはなかなか掘れない。昼組は帰りに枯れ木を山に積み火をつけて帰り、翌日にはそこをまた掘る。夜組はまた帰るときに火をつけて帰るのだ。ある日、死亡者が運ばれて来たので、もしや知っている人でも来

たかと思ひ行つてみたら、自分と同年兵の千葉勝也君ではないか。はっと驚いてそばへ寄つて見たら、まぎれもない千葉君だ。それが何と、右手に黒パンを持つたままではないか。朝の食事中に死んだと聞いていたが、何とだれもがパンも取らずに死体の安置室へ送ったのか。涙がとめどなく流れた。

## 無 題

新潟県 室 橋 正 一

ソ満国境で戦闘配置にしていた私の所属部隊が、ソ連軍の命令で国境から延吉市に向かって出発したのは八月十六日だ。延吉市までの道中には日ソ両軍の累々たる死体が折り重なっていて、その悪臭は鼻を突き目にしみ込んで、嘔吐感で神経が錯乱する。とてもこの世の情景とは思えない。豆満江の支流には、人馬の死体が無数に流れていて、水面は人の油でへドロ口状だった。